

## 藤沢周平『蟬しぐれ』における人間観

### View of Human Being in Fujisawa Shuhei's *Semi Sigure*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2010年9月7日受理)

Fujisawa Shuhei's full-length novel *Semi Sigure* was published daily in *Yamagata Shim bun* from 1986 to 1987. The intention of the work is simply explained by the author. I wrote the process of the boy of one samurai family who matures into a young man through swordsmanship and friendship, and a faint feeling of protagonist's love in a serial story in a newspaper".

The purpose of this paper is to consider the view of human being in Fujisawa Shuhei's *Semi Sigure*, which is categorized as Bildungsroman.

**Key words:** Fujisawa Shuhei, friendship, faint felling of love, view of human being, Bildungsroman

#### 1. はじめに

藤沢周平(1927-1997)が著した「武家もの」の最高傑作とされる長編小説『蟬しぐれ』は、1986年7月9日から1987年4月13日にかけて「山形新聞」(夕刊)等に連載されたものである。

作品の意図は、「一人の武家の少年が青年に成長していく過程を、新聞小説らしく剣と友情、それに主人公の淡い恋愛感情をからめて書いてみた」<sup>1)</sup>という作者の言につきている。すなわち、この作品は、海坂藩の下級武士・牧文四郎の成長を描いた教養小説であるが、同時に男女の哀切な恋の行く末を描いた恋愛小説でもある。

『蟬しぐれ』には、その冒頭から、印象的な場面が目白押しである。やまがかしに噛まれたおふくの指を文四郎が必死に吸う場面(「朝の蛇」)、派閥争いにかかわり囚われた義父との息詰まる対面の場面(「黒風白雨」)、父の遺骸を荷車で引く文四郎をおふくが泣きながら手伝う場面(「同上」)、反逆者の子と遠ざけられた文四郎がその不遇感を道場での試合にぶつける場面(「落葉の音」)、江戸の屋敷に奉公にあがったおふくに殿の手がついたことを文四郎が知る場面(「家老屋敷」)など、物語の前半だけでも次々に登場してくるといえる。

物語の要所、要所にこうした秀逸で精彩を放つ場面

があるところにも、多くの読者が支持する理由があるといえる。

本稿の目的は、この「教養小説」ともいべき藤沢周平の小説『蟬しぐれ』における人間観について考察することである。まず、「父子の情」から始めたい。

#### 2. 父子の情

父子の情を考察する前に、藤沢周平の時代小説について概観しておきたい。彼の時代小説は、大きく「市井もの」と「武家もの」とに分けられる。

「市井もの」では、江戸一般庶民の人生の哀歎や人情の機微が繊細かつ詩情豊かに描かれており、読者には感情移入しやすい。

藤沢の「武家もの」は、活劇があるのはもちろんであるが、端正で的確な描写力によって、真剣であれ竹刀であれ、いかなる立ち合いの場面であろうと生き生きと人物が動き出し、緊迫感が伝わってくるのが魅力的である。

ただし、武士という存在の特殊性は、否定し難い。士農工商という封建社会において最上位に位置し、農工商に君臨する形の武士には、様々な束縛や制約があった。強固な身分制度による藩内の上下関係は厳然たるものである。さらに慣習や法度に加えて、藩命という絶対的なものがあつた。藩命は時に死をも意味する

ことがあったのである。

さて、父の牧助左衛門は、文四郎とは血のつながらない養父である。幼くして文四郎は実の叔母が嫁いだ牧家の養子に入ったのである。小禄の普請組に属する寡黙な父を、文四郎は血のつながっている母よりも敬愛している。

土木・建築を司る普請組の組衆は、藩政の中核から遠く隔たっているせいなのか、軽輩として扱われるのが諸藩の習いである。海坂藩普請組の組衆も、家禄が三十石以下である。百から二百石を下付される中級藩士と比べると、きわめて少ない。

要するに、牧文四郎の父・助左衛門は、地位は低く稼ぎも乏しい下級藩士に他ならない。だが、15歳の文四郎は、そんな父を心の底から敬愛している。その理由については、「父の助左衛門は寡黙だが男らしい人間」に思えた、とだけ書かれている。この説明で、文四郎が父を敬愛する理由は理解できる。

地位が低くても稼ぎが乏しくても、父は迷いも悔いもなく生きる姿を見せることによって、おのずと息子の尊敬を得る。多くの言葉よりも、父親が身にまとった空気が伝える無言の言葉によって、息子は父の生き方を知るのである。

嵐の夜、洪水の現場で農民のために敢然と対策を主張する父の姿を目の当たりにし、文四郎の父に対する信頼と尊敬は揺るぎないものとなる。

文四郎は、嵐で増水した五間川の堤を切る作業に駆けつけたとき、はじめて普請組の組衆としての父の仕事ぶりを目の当たりにする。助左衛門は、取り入れの稲田を水没から守るべく、奉行助役に堤防切開の場所を変更することを主張した。その意見に説得され、奉行助役は作業隊を率いて、上流の鴨の曲がりへ向かって走る。文四郎も、それに従って走った。

一おやじはすごいな。

と文四郎は走りながら思っていた。

助左衛門は家の中ではあまり物をしゃべらず、登世や文四郎に何か言うときは低くやさしい声で話す。その助左衛門が気迫のこもる熱弁をふるって、十町歩の稲田をつぶす柳の曲がりの切開を阻止したことが、文四郎の胸を感動で熱くしていた。一父を見習いたい。

文四郎はそう思い、助左衛門に対する日ごろの尊敬の気持ちがいつそう高まるのを感じた<sup>2)</sup>。

ここには、寡黙な父とその背中を見つめてきた息子との、新たに始まった豊かな対話がある。

さて、以上のことが伏線となって、『蝉しぐれ』における父と息子のストーリーは、最も印象的な場面に導かれる。

文四郎、16歳の夏に、父の助左衛門が藩主の世継ぎをめぐるお家騒動に巻き込まれ、政争に敗れた側に連座して切腹を命じられる。突如、反逆の汚名を着せられた助左衛門の処刑が決まる。運命が暗転する。与えられた瞬時の別れに、父は子に短い言葉を残す。

「変わりはないか」

と助左衛門が言った。いつもと変わらない落ちついた声だった。文四郎はいはいと言った。ここまで来ても、父親との今生のわかれに何を言うべきがよくわからないで、文四郎が焦っていると助左衛門が助け舟を出すように言った。

「今度のことではさぞびっくりしたろう。心配をかけた」

「父上、何事が起きたのかお聞かせください」

と文四郎は言った。だが助左衛門はすぐには答えなかった。少し沈黙してから言った。

「それは、いずれわかる」

「……………」

「しかし、わしは恥ずべきことをしたわけではない。私の欲ではなく、義のためにやったことだ。おそらくあとには反逆の汚名が残り、そなたたちが苦勞することは目に見えているが、文四郎はわしを恥じてはならん。そのことは胸にしまっておけ」

「はい」

「矢田作之丞どのに話を聞いた。道場の若い者の中ではもっとも筋がいいそうだな。はげめ」<sup>3)</sup>

この父の言葉を信じ、ひたすら剣の修行に励むことで文四郎は逆境に耐えるのである。

切腹した父を文四郎は、一人で引き取りに行く。寺の門から運び出された父は、眠るように穏やかな顔をしているが、首から胸にかけて痛ましく血に染まっている。父の首には、皮一枚を残した介錯の跡を示す縫い目がある。

父の遺骸を載せた荷車を引いて、文四郎は城下の町を通っていく。炎天下である。暑熱のせいで、一人で引く荷車がなおさら重く感じられる。骸にかけた菰の端から、父の青白い足先がのぞいている。白昼の町中で、軒下に立つ人々が刺すような視線を送ってくる。

しかし、この悲惨な辛酸が、あろうことか文四郎と父とのかつてなかった次のような親密な触れ合いの

時ともなった。

武家町や寺町といった、人通りの少ない道に入るとほっとした。文四郎は道に梶棒をおろし、喘ぎを静めながらさかさまに天を指している青白くて大きい父の足を見る。すると、いかにもいま父と二人きりでいるという気がして来るのだった。父上、いままの辛抱ですぞ、と文四郎は胸の中でささやきかけて梶棒をにぎり直した。実際そう思ったあとは、いくらか元気がもどって来る気がした<sup>4)</sup>。

藩への謀反に連座して腹を切らされた父の亡骸を荷車に載せ、衆人環視の中を運んで行く。これは、16歳の少年にとっては、あまりにもむごい辛苦である。しかし、その辛苦の中にも恵みはあった。先述のように、文四郎はかつてなかったほど親密に、敬愛する父と触れ合うことができたのである。「そこに、人生闇と光を背中合わせにしてとらえる、藤沢周平ならではの人生観が現れている」<sup>5)</sup>といえる。

### 3. 変わらぬ友情

同じ道場に通う牧文四郎、小和田逸平、島崎与之助の友情は、『蟬しぐれ』における一つの重要なテーマである。いささか露悪的な物言いをする逸平と、まじめひとすじで剣は苦手だが学問に早くも才能を開花させるのが与之助である。

あるときは空鈍流石栗道場に通う仲間、あるときは期待と不安が入り混じる将来を語り合う少年たち、あるときは互いの悩みをぶつけ合う友、あるときは藩政の動きを捉え一緒に行動する同志、と三人は物語のすべてにかかわって、そのつながりを確かなものにしていく。

どの場面でも、かたくしかも細やかな友情が現れている。特に強い印象を与えるのは、切腹を言い渡された父を寺に訪ねて帰る文四郎を逸平が待ちうけともに歩く場面である。

蟬しぐれの降りしきる中、二人は、強い日が照らし白く輝く道を無言のまま歩き続けた。

「泣きたいのか」

と逸平が言った。二人は、歩いてきた道と交叉する畑に沿う道に曲がり、幹の太い樺の下に立ちどまっていた。旧街道の跡だというその道は、樺や松の並木がすずしい影をつくり、そこにも蟬が鳴いていた。

「泣きたかったら存分に泣け。おれはかまわんぞ」

「もっとほかに言うことがあったんだ」

文四郎は涙が頬を伝い流れるのを感じたが、声は震えていないと思った。

「だが、おやじに会っている間は思いつかなかった」

「そういうものだ。人間は後悔するように出来ておる」

「おやじを尊敬していると言えばよかったんだ」

「そうか」

と逸平が言った。文四郎は樺の樹皮に頬を押しつけた。固い樹皮に頬をつけていると、快く涙が流れ出た。そしてそのあとにさっぱりとした、幾分空虚な気分がやって来た。

涙をぬぐってから、文四郎は逸平に向き直った。逸平の眼がまぶしかった。

「少しみっともなかったな」

「そんなことはないさ、男だって木石じゃない。時には泣かねばならんこともある」<sup>6)</sup>

一人で抱えきれない文四郎の苦しみを、逸平が分かち合おうとするのではないし、そういうことはできない。それが可能であるならば、苦しみはもともとなかったに等しい。

どこまでも文四郎について歩く、いつもは陽気でおせっかいな逸平の無言の振舞いは、それを物語る。逸平にできることは、ただ文四郎の苦しみと悲しみに、そつとよりそうだけである。それが、文四郎を自らの苦しみと悲しみの途方も無さに直面させ受け止めさせたのである。

おふくが文四郎を思うのとはまた違った、男同士の友情が熱く感じられる場面である。いくら心を許した仲であっても、武士は人前で涙を見せぬものであった。まして二人とも禄高は違っても一家の当主である。しかし、この二人はそれを許しあっている。

総じていえば、封建社会で特に支配層、例えば武士階級の間に、情なるものは成立し難い。何よりも、個人の独立がないからである。家と家との関係に、個人の入り込む間は限られている。家の関係も同じようである。家中、藩士といえども上士、中士、下士と身分の厳然とした差別があり、それを越えるのは生半可なことではない。

また、一言で家の関係といっても、それはそのとき一代のものではなく、累代の関係である。当人同士は親交していたとしても、たとえば婿養子に入った先の家とその友人の家とが、何代か前の因縁で仲が悪くな

ると、親交は途絶する。そのようにせざるをえない。個々のつながりは、優先されない。それが主従より優先されると、封建の秩序は保たれない。友情はむしろ農工商、特に町人社会で結ばれていった。

武家たちの友情は、家を継ぐか、部屋住みの次男、三男であればどこかへ婿養子に入るかの、それ以前の少年期に辛うじて育まれる。友情が生涯にわたって続くことは珍しい。文四郎、逸平、与之助の三人の友情は、三十年ほども続いていることになる。その間には、お決まりの政争があった。幸いにして敵味方に別れることはなかった。むしろ、逸平、与之助は文四郎を助けてときに立ち回り、ときに情報を流した。お互いがお互いを常に一番に案じていた。

仲間の境遇が変わっても、歩む道が違っても彼らの友情に揺らぎはない。彼ら三人は、いつも互いを思いやり、助け合い、互いに遠慮ない相談相手であり、ある意味では家族以上の存在であるといえる。

おふくを救うため櫛御殿に出向こうとする文四郎に逸平は、一も二もなく同行を申し出る。命の危険は承知の上だ。十代の少年期から青年期にかけて築かれたこうした友情は、終生変わることがないだろう。

#### 4. 死にゆく者の気持ち

文四郎を旧禄に戻して郡奉行支配下におく旨の沙汰が下る。逸平に伝え、かつての隣人たちにも知らせをとおふくの家を訪ねた文四郎は、そこで彼女に藩主のお手がついたことを知る。おふくの家は出世し、もうそこにはない。文四郎の胸に、悲しいほどの愛おしさがつのってくる。物思いの炎が、彼の胸を焦がした。文四郎は、おふくへの思いと父の死の真相を知りえないことに鬱屈する。

おりしも、文四郎は自分が通う石栗道場と松川道場の恒例の親善試合に選ばれる。最強者との対戦に勝った文四郎は、秘剣村雨を伝授される。しかし、それは師からではなく、藩主の叔父でかつて名家老といわれた加治織部正、名門中の名門の当主からであった。伝授の前に文四郎は、織部正から三年前の政変、父の死の真相、藩の勢力状況などを聞かされる。

文四郎が旧禄に戻されたのも、いわば藩を二分する勢力の綱引きの結果であったが、そこには、数年前の洪水の際、堤防の切開箇所をめぐって父助左衛門の提言が受け入れられ、十町歩の稲田が助かったことに対して、当該の村から助命嘆願書が出されていたという事情もあった。織部正は、反対派は政権派をつぶすこ

とが狙いだから、油断するなと告げた。

政というものの非情を感じる文四郎に、父と同様に断罪された剣道場の兄弟子であった矢田作之丞の未亡人が、相対死にしたということが伝わる。それは、未亡人の弟の布施鶴之助からであった。

一人の世は……。

はかない、と文四郎は思った。その感慨は父の死に遭遇した十六の文四郎にはなかったものだった。そしてその感慨には、やはり父の死のときにはなかった憤りがふくまれていた。

父の助左衛門が死んだときは、あとに残された母とふたりでいかに牧の家を守って行こうかと、異様なほどに気を張りつめたまま、悲しむことも憤ることも忘れたような日々を送ったのだが、いまは矢田の未亡人の命を奪った者の姿が明瞭に見えた。

一罪は……。

藩にあると文四郎は思った。生殺しのような藩の処遇に堪え切れなくなって、矢田の未亡人は自裁をいそいだのだ。野瀬を道連れにしたのも、鶴之助に言ったように、自分を矢田家にしぼりつけている武家の掟に、及ばずながらしっぺ返しを喰わせるつもりだったのではないか<sup>7)</sup>。

『蟬しぐれ』が封建時代にも育まれる友情譚や淡い恋物語にとどまらないのは、こういう箇所があるからである。というのも、

封建の世の無惨、薄情、けっして人を自由には生きさせない構造を、それこそ一閃の描写のうちに抉り出すからである<sup>8)</sup>。

矢田作之丞を反逆者として処分したのだから、家も潰せばよいのである。そうすれば、夫人は実家の布施家へ帰れる。しかし、そこに権力争闘の綱引きがからみ、家を潰させない。わずかの禄米を支給して家を守れと命じる。家が残るか否かが大事であって、そのことによって泣く者のいることは、顧慮されない。若く、美しくもある夫人は身動きがならない。一年、二年、三年と、我が身ひとつさえ自由にさせないのが封建時代の武家の掟であった。ただの自裁では、気高くありたいとする夫人の胸のうちはおさまらない。

文四郎に、政権派の里村家老から呼び出しがかかる。おふくが産んだ子を奪ってこいという命令であった。おふくは、藩主の寵愛をあつめたが、それがかえって側室の妬みを買ひ、命を狙われて不審な事件が頻発していた。

藩には、権力争いが絶えなかった。藩主の後継をめぐって、最近も正室の子を推す派と側室の子を推す派が対立し、いったんは正室の子を世子として將軍の謁見も終えたが、正室の子は病弱を理由に隠居、代わって側室の子、異母弟が世子となり幕府の許しを得た。

文四郎の父らは、正室の子を次期藩主として推し、里村家老派の巻き返しの中で反逆者として処断されたのである。権力は側室と一体になった派が握った。文四郎に藩命としておふくの子を奪えと指示する里村家老は、その中心であった。

里村家老は、反対派がおふくの子を奪って次期藩主にしようとしたり、あるいは殺害して家老派の仕業に見せかけ、権力奪取を狙っていたりするので、保護するのだという。

文四郎は、そこに陰謀を感じず。相談した逸平も、与之助も畏だという。しかし、文四郎は断れない。断れば、家禄、屋敷を取り上げられ、たちまち家族もろとも路頭に放り出されるからである。文四郎は覚悟を決める。おふくに事情を話し、反対派の元家老のもとに身を寄せることにする。

決行の日、案の定、里村家老派は、おふくや文四郎らを皆殺しにしようとして襲って来る。文四郎は、逸平や布施鶴之助らの力も借りて脱出し、元家老の屋敷が見張られていると見るや、おふくと彼女の子を連れて、加治織部正のもとに駆け込んだ。

人の命を何と思うのであろうか。文四郎の胸が煮えたぎる。それを見てとったか、織部正は軽拳妄動をつつしめという。しかし、文四郎は家老の屋敷に足を向ける。文四郎は見咎めた家来を制し、それでも襲いかかってきた者を峰打ちで倒し、家老の部屋に入った。

家老は一人だった。こまかい書類でも見ていたらしい。里村家老は眼鏡をかけていたが、その眼鏡をはずした。文四郎は襖をしめずかずかと歩いて里村が向かっている机から三間ほどの場所に坐った。

「軽輩とみて、侮られましたな」

里村は無言で文四郎を見ていた。文四郎の姿を見たときに、今夜の計画が齟齬をきたしたことを悟ったはずだが、顔にはその失望を出していなかった。家老は無表情な眼を文四郎にそそいでいる。

「無益に、人が死にましたぞ」

文四郎は低い声でつぶけた。

「それがしも、ふりかかる火の粉ははらわねばなりません。ご家老方がたの、私利私欲のために人

が死んだのです」

「ちがうだろう」

里村家老が、はじめて声を出した。

「藩のために死んだのだ」

「お黙りめされ」

文四郎は鋭く言った。斬ってやろうかと思うほど、眼の前の家老に殺意をおぼえていた。

「さような物の言い方は、もはや聞き飽きましたぞ。どうやらご家老は、死んで行く者のお気持ちを推しはかれぬお方らしい。死に行く者の気持ちとは……」

文四郎はすばやく膝でいざって前にすすんだ。そのときにはもうつかみ上げた刀の柄に、手がかかっている。片膝を立てると八双からの剣をふるった。里村の眼には、一閃の白光が走ったとしか見えなかったはずである。

脚を二本切られた机が傾き、机の上の書類や書籍が音を立てて畳になだれ落ちた。刀を鞘にもどしながら、文四郎は言った。

「その気持ちは、かようのものです」<sup>9)</sup>

ここには、藩という一国の政に思いをめぐらせ、常に万民のありようを価値の規範とすべきでありながら、いつしか「私」に至上の価値をおき、それを藩のため国のためと言い繕う家老の退廃がある。

他方、また出発点は愛であり、友情であり、家族であり「私」でありながら、その「私」に人間存在の原点を見つけ、そのありようを問題にして人が生きることの根本の意味をとらえ、そこに至上の価値がおかれなければならないことに思い至る文四郎の成長がある。この二つの対比が、あざやかである。

## 5. 男女の情—おわりにかえて—

単行本で書き加えられた部分は、新聞の連載で見れば最終章の、さらにまた最終回に集中している。

「文四郎まいる」と記された手紙を読み、おふくが忍んで待つ漁師村の湯宿にかけつけた文四郎（現在は助左衛門）。「せっかくお会い出来たのですから、むかしの話をしましょうか」というおふくの言葉をきっかけに、二人は少年時代の思い出話をし、ついで文四郎の娘の話になった後、『蝉しぐれ』で最も有名な言葉を含む部分が出てくる。実はこの場面はすべて、新聞連載時にはなかったものである。

「二人とも、それぞれにひとの親になったのですね」

「さようですか」

「文四郎さんの御子が私の子で、私の子供が文四郎さんの御子であるような道はなかったのでしょうか」

いきなり、お福さまがそう言った。だが顔はおだやかに微笑して、あり得たかも知れないその光景を夢みているように見えた。助左衛門も微笑した。そしてはっきりと言った。

「それが出来なかったことを、それがし、生涯の悔いとしております」

「ほんとうに？」

「……………」

「うれしい。でも、きっとこういうふうになるのですね。この世に悔いを持たぬひとなどいないでしょうから。はかない世の中……………」

お福さまの白い顔に放心の表情が現れた。見守っている助左衛門に、やがてお福さまは眼をもどした。その眼にわずかに生気が動いた<sup>10)</sup>。

すれ違いはじめて二十数年、二人の心にそれぞれふり積もった鬱屈の交感がここにはある。

もはやとりかえしがつかないという思いとともに、そうした思いがあるゆえにこそ、今ここでかわさねばならない鬱屈が二人の微笑の奥にはある、と言い換えてもよいであろう。

この場面で注目すべきは、物語の冒頭で蛇に噛まれたおふくの指を吸うという行為を除いて、おふくとの関係ではいつも消極的で、その分だけよけいにおふくの「大胆さ」をきわだたせてきた助左衛門に、「そしてはっきりと言った」とわざわざ断った上で、実に直截な言葉を語らせた点である。

「それが出来なかったことを、それがし、生涯の悔いとしております」というこの言葉は強い。『蟬しぐれ』において文四郎の発した言葉の中で最も強い言葉とあってよい。

二人の鬱屈の交感にあって、文四郎の強い思いと積極性を確認しうるなら、おふくの駕籠が砂丘の陰に隠れるまでに見送り、おふくの白い胸を思い浮かべ、聞こえてきた黒松林の蟬しぐれに子どもの頃矢場町でおふくと聞いた「蟬しぐれ」を思い出し、そして馬腹を蹴って熱い光の中に走り出る、という一連の書き加えた部分もまた、文四郎の強い思いと積極性に関係するのがわかる。

藤沢周平は、最終章の最後に至って、連載時以上に文四郎の背中を押したかったのであろう。なぜである

うか。それは、物語が若い文四郎に課した試練のあまりの大きさ・過酷さに、藤沢周平自身が気づいていたからに違いない。突如襲いかかった敬愛する義父の監禁、反逆の罪による切腹。そして、斬られた首が縫い付けられた遺骸の引き取り。

これらは、元服前の少年にとってはあまりに過酷な出来事であった。しかし、よりいっそうむごいのは、これらの出来事を抱え込みながら、なお文四郎が武家社会を生きぬかなければならなかったことである。

もちろん文四郎に課せられた試練は、そこにとどまらない。試練の始まりにおいて彼の苦悩を和らげていたおふくが、突如江戸に行き、まもなく藩主の寵愛をうけることになった。

反逆者の子として武家社会の秩序の最も低い場所に投げ捨てられた文四郎と、秩序の頂点に心ならずも引き上げられたおふくとの距離は、絶対的なものである。この点については、

転落は這い上がる物語をうみ、距離はそれを埋めようとする物語をうむ<sup>11)</sup>。

との指摘もある。したがって『蟬しぐれ』は、大きく過酷な試練を次々にもたらすストーリーに見合った、文四郎の人間としての成長を、父子の情・友情・男女の情を通して描くことによって、藤沢周平の人間観を浮かび上がらせているものであるといえる。

## 文 献

- 1) 志村有弘編：藤沢周平事典，p. 205 (勉誠出版，2007)
- 2) 『蟬しぐれ』からの引用は、全集版によった。藤沢周平全集 第二十巻，p. 370 (文芸春秋，1992) 以下においては、アラビア数字で頁数のみを示す。
- 3) 402-3
- 4) 412
- 5) 野火迅：へたな人生論より藤沢周平，p. 24 (河出書房新社，2009)
- 6) 405
- 7) 529
- 8) 新船海三郎：藤沢周平 志たかく 情あつく，p. 227 (新日本出版社，2007)
- 9) 611-2
- 10) 636
- 11) 高橋敏夫：藤沢周平という生き方，p. 106 (HP研究所，2007)